

さいたまここに人あり



自転車を通して地域・国際貢献を

「Re:さいたま」

廣岡ひかり さん

埼玉大学に自転車を通して地域貢献・国際貢献をめざすサークル「Re:さいくりんぐ」があります。当初3人で始めた活動も、いまではメンバーは20人を超えました。今年の春からは大学内でのレンタサイクルをスタートさせ、「自転車を捨てない」システムづくりを模索しています。

また、東日本大震災への支援では、宮城へ自転車を送る取り組みもおこないました。「Re:さいくりんぐ」のメンバーである廣岡ひかりさんに、取り組みを紹介してもらいました。

放置自転車で国際貢献

「Re…さいくりんぐ」は、①「自分さえ良ければいい」ではない自分、②大きな1歩より小さな1歩、③1人でも多くの子ども達に教育機会を、④「与える」で終わらないつながりを、をモットーに2007年に活動をはじめました。これまでに、東ティモールの学校に大学内の放置自転車180台を送ってきました。きっかけは、サークルを立ち上げた先輩に届いた、埼玉大学OGからのメールでした。

「東ティモールに日本の放置自転車を送ってほしい」。東ティモールあるNGOが運営する職業訓練校に、生徒の通学用に自転車がほしいというんです。

先輩は最初、「忙しいから」と躊躇したのですが、「ゴミとして捨てられてしまうものが、誰かの役に立てるなら…」と決意。所属していたバスケットボールサークルの後輩に声をかけて、3人でスタートしたそうです。

まずは、自治体に放置自転車を譲ってくれないかと交渉にいきました。でも、

自治体はすでに修理して販売するなど、行き先が決まっただけでダメでした。

そんななか、埼玉大のなかでも、年間300台の自転車が放置されていることを知ったんです。これをどうにかできないかと、大学と交渉をしました。でも、「前例がない」「修理や輸送にかかるお金のめどが立たなければ渡せない」といわれました。

東ティモールと「つながる」

2010年夏、私を含めて6人のメンバーが、東ティモールを訪れました。東ティモールの人たちが、自分で修理して自転車を使いつづけられるように、自転車修理の技術を伝えるためです。

その前年に東ティモールを視察した先輩が、「Re…さいくりんぐ」が送った自転車が壊れたまま放置されていることを知ったんです。現地は道路状況も悪く、修理する技術も道具もないため、うまく

前例がないなら私たちがつくるしかない。そのためにも資金を集めなくてはと、学内でおこなわれた社会貢献・地域貢献支援プランに応募しました。読売新聞さんや埼玉トヨベツトさんがスポンサーでついていたんですが、このときのプレゼンテーションで私たちのサークルは資金をいただくことができました。

スポンサーのひとつには、「いい活動だからいまは応援するけど、支援は2年だけ。その先は、自分たちの力で活動に協賛してくれる人を見つけて、自分たちの力でやっていくように」といわれました。

使われていない…。

私たちはその教訓を生かして、「送るだけじゃない支援」を実践するために、修理講習を目的に東ティモールへ向かいました。

現地では、これまで送ってきた自転車が、ほこりを被って放置してありました。先輩から聞いてはいたけれど、6人はショックというか、あせんとしました。とにかく、学生の有志をつのって、そ



の自転車の修理を一緒にやりました。みんなすごく積極的で、飲み込みも早いし、自転車が好きなんだと分かってくれしかなかった。なかには、「自転車修理の仕事をした」と言ってくれる子もいました。私も英語はあんまりできないけど、一緒に作業するなかでコミュニケーションが生まれて、すごく楽しかった。

「Re...さいくりんぐ」のモットーの

ひとつである「『与える』で終わらないつながり」を実感しました。やっぱり、送っただけで満足する国際貢献じゃダメだと思いました。本当の意味での「支援」、「必要とされている」って感じました。

それまでも、「自転車と一緒に思いも送る」という気持ちはありました。それは東ティモールにも伝わっているんじゃないかという自信もありましたし、現地の実情に手を打てないという思いも

ありました。でも、実際に現地に行ってみて、「必要なのは自転車じゃなくて、それを使いつづけるシステムと人だ」ということが分かったんです。

東ティモールの学校への自転車輸送はひとまず終わりましたが、これからも東ティモールと関わりつづけるつもりです。新たに「モンゴルへ自転車を送ってほしい」という声をいただき、それもいま、模索しているところなんです。

レンタサイクルをスタート

この4月からは、大学内でレンタサイクルをスタートさせました。これは、当初から「自転車を送ることだけが目的じゃなく、放置自転車を減らすことも必要だ」という思いがあったからです。自転車を譲ってもらったとき、大学から「送りたいだけ自転車がほしいというのでは都合が良すぎる」と指摘され、メンバー内で放置自転車が生まれてしまう状況に問題意識があったからなんです。

埼玉大学には、県外からもたくさんのお客様が来ます。彼らにしてみたら、4年間は通学で必要だけど卒業して持って帰

るのは難しいんです。「いらなから捨てる」という学生の意識を変えていかなければいけない。そのために、放置自転車を有効活用したいと思いました。

最初は、中古自転車として売れば、活動の資金にもなるという意見もありました。でも、自転車のリサイクルにはなるけど、いらなくなれば捨てるということには変わらない。使い捨てじゃなく、愛着を持って自転車に乗ってほしいから、レンタサイクルという形を選んだんです。

いま、「Re...さいくりんぐ」のなかでレンタサイクル部門をつくって、活動

しています。おもに新入生向けに、何カ月という期間での貸し出しです。

ただ、自転車を修理しても、TSマークというのを付けないと公道で走れません。これは、自転車屋さんで見てもらっ

被災地・宮城に自転車を

今回の震災で、たくさんの方が大切なひとやもの、居場所をなくしました。いま、被災地の復興のため、日本中が動いています。そして、私たちにもなにかできることはないか…と考えに考えた結果、私たちのやり方で被災地の方々の手助けをしようということになりました。

阪神淡路大震災のときに交通手段として自転車が活躍した、という記事をヒントに動き始めました。送り先を探していたところ、県内の避難所にニーズがあることを知り、片柳コミュニティセンターに10台、土呂の避難所に5台を自転車を持っていきました。輸送手段は人力です（笑）。今後も、県内はニーズがあれば、届けにいく予定です。

もちろん、被災地の宮城県山元町にも自転車を届けました。自転車を津波で流

てOKをもらわなくてはダメなんです。そのための、お金もかかります。今年の課題は、資金をどうつくっていくかです。いまは、個人や団体などに支援をお願いしているところなんです。

されてしまった人もいるので、「とても助かる」という声をいただきました。自転車は地元の子どもたちの通学などで使われるそうです。

届けたメンバーの声を紹介します。

現地を訪れて

被災地に行つて、意外にも被害がないのかなと思つていたんですが、沿岸部は「光景がガラリと変わり、瓦礫の山、山。町には船が横たわり、家なのか何なのかわからない瓦礫たちが無造作に散らばるのを見て、正直言葉になりませんでした。あまりにもひどい状況を目にして、平然としてはいられないまま、自転車を町の体育文化センターに届けました。そこで、地元ボランティアの人たちが明るかつ



たこと。正直、不思議な感じでした。たった1、2時間しかいなかったけれど、目にしたこと、聞いたこと、感じたことがあまりにも大きすぎて頭の整理がつきませんでした。

いま埼玉に戻りましたが、時間が経てば経つほど、被害の酷さが伝わってきました。未だに被災地にどう支援していったらいいのかなんて、わかりません。そこを模索しながら、「Re:さいくりんぐ」として私たちには何が出来なのか、考えていきたいと思っています。

〈吉村信吾〉
学生団体である「Re:さいくりんぐ」が今できることは、義援金を集めたり、



自転車の修理もすべてメンバーの手でおこないます

物資を集めて送ることではないかと感じていました。津波で被害に遭った人たちは自力で瓦礫の撤去もできず（立ち入り禁止になっているところもある）周囲が「復興」「復興」という言葉をかけるほど、無力感に陥るのではないだろうか？と思います。被災をされた人たちは本当に頑張っています。そこに「がんばろう」「がんばれ」なんて簡単に言葉をかけてはいけない気がしました。みんなが同じ状況、苦しい状況だから自分が「苦しい」と言えずにいる人たちがいるのでは？と思います。被災者同士以外の不安を語れる場みたいなのがあるといいなって：物資はたくさんあると話していました。そろそろ、衣食の次のステップの支援が必要ではな

いでしょうか。

〈小林夕紀恵〉

今回、たくさんの方の協力をいただき、自転車を届けることができました。

現地へ行つて、まず、テレビで見た瓦礫の山のような津波の跡が、私が想像していた何倍もの広さでいきなり車の窓から現れました。何も言えませんでした。そこに本当に町があつて人がいたのだろうか、鳥肌がたちました。

そして、山元町文化センターという支援物資を受け付けているところに自転車を届けました。私たちのトラックが着いた途端、地元の方々と自衛隊の積み降ろしを手伝ってくださいました。

私が現地へ行つて思ったことは、自分

大きな1歩より、

小さな1歩

私たちは、「Re...さいくりんぐ」の

活動を通して、「自転車で人と人をつなぐ」ことをめざしています。国際貢献・社会貢献って、お金やモノ・人を送るとかいろいろあるけど、自分たちは自転車を中心に海外や地域・町の人たちと交流したい。学内でも、昨年夏に「チャリサミット」を開催し、自転車をテーマにディス

の無力さでした。彼らに対して、何も言うことができませんでした。でも、確実にできることはあるのではないかと思えます。想いを持ちつづけることも、その一つだと思います。

体育センターにはいろいろな支援物資が届いていました。しかし、何カ月後、何年後、テレビで頻繁に取り上げられなくなったらどうなのだろう、と思えました。現地の方がおっしゃるには、地域によつては、被害はあるけれどマスコミにあまり取り上げられないため、外部からの支援が少なかったりすることもあり、山元町もその一つだそうです。

〈栗原香菜〉

カッションしました。

モットーである「大きな1歩より小さな1歩」は、学生が活動していくうえで、本当に重要だと思えます。一人ひとりがちよつとずつ、一人でできなければみんなでも、チャレンジすることは忘れずに、無理をしない小さな1歩を踏み出したいと思えます。